

抗日戦争期における

日本人民の反戦運動

伊原 沢 周

はじめに

戦後五十年を迎える今年、「戦後五十年決議」をめぐって連立政権である村山内閣では、「植民地支配」や「侵略戦争」など過去の行為を深く反省し、おわびすると表明すべきであると主張する推進派と、それに対して、「反省」や「おわび」との文句を削除しようとする意見を堅持する慎重派が、「決議案文」について大論争を行なった。これは、戦争に対する日本人の複雑な心情を物語っている一面である。

日中戦争から太平洋戦争へと強行した日本の軍国主義者が、アジア諸国民を初め、多くの国の人々に与えた苦痛は、いまだに残存している。戦争受害国の一部の国民は、過去の日本軍国主義者の暴行を厳しく非難すると

もに、日本民族を「好戦的な民族」とさえきめつけている。

確かに、明治政府成立後の日本は、富国強兵とのスローガンの下に、対外拡張政策を採っていた。征台の役（一八七四年）、江華島事件（一八七五年）、日清戦争（一八九四年）、日露戦争（一九〇四年）、さらに満州事変（一九三一年）、日中戦争（一九三七年）、太平洋戦争（一九四一年）、これら一連の戦争は日本の軍国主義者に制覇と破壊をもたらした。この、人々を苦しめた歴史の教訓を反省し、軍国主義思想の復活を抑制し、平和と民主主義を守り、二十一世紀のアジア諸民族、国家間の平和、友好、繁栄を創出することは、今後、日本民族の至上使命である。

日本民族は、決して「好戦的な民族」ではない。かつて軍国主義者支配下の日本で、反侵略戦争を唱えた多くの日本人が存在していた。たとえば日露戦争当時、社会主義者である幸徳秋水・堺利彦らは『平民新聞』によって反戦運動を展開し、また、キリスト教社会主義者の内村鑑三は、『聖書之研究』を、西川光二郎らは『労働世界』を発行して非戦論をさかんに訴えていた。

昭和時代に入り、社会主義思想の成長と発展によって、

マルクス主義の共産主義と社会民主主義への分化が始まった。日中戦争当時、日本人民の反戦運動の主流は、共産主義と社会民主主義・自由主義に属する人たちであった。

本論は、民族、国家、政党、宗教を越え、もっぱら客観的な視角から、歴史の真実に向かって日本人民の反戦運動の真実を究明しようとするものである。

一 弾圧下の反戦運動とその挫折

一九三七年七月七日に起った盧溝橋事件によって日本は、中国との全面戦争に突入した。同年八月二十四日、国民の結集をはかるため、第一次近衛文相内閣は、国民精神総動員実施要綱を決定した。ついに「挙国一致」「尽忠報国」「堅忍持久」という三大スローガンをかかげ、国民を総動員し、戦争に協力させた。それと同時に、治安維持法の拡大解釈によって、共産主義者はもちろん、キリスト教社会主義者および一般の自由民主論者の反戦、反ファシズム運動を弾圧した。

大規模な弾圧は、同年二月一五日と、翌三八年二月一日の二回にわたる「人民戦線事件」である。人民戦線

の結成は、一九三五年の夏、コミンテルン第七回大会の全世界反ファシズム人民戦線結成の呼びかけに呼応して、日本では鈴木茂三郎・加藤勘十らが中心となって左翼の諸進歩勢力を集結し、反戦、反ファシズムとして活動した。当時、日本共産党はほとんど絶滅していたが、人民戦線の諸団体である日本無産党（三七年三月結成）、日本労働組合全国評議会（略称は全評、三四年一月結成）、労働派（二七年二月結成）などの反ファシズム、反戦の人民戦線が存在したことは、意義が深い。

しかし、人民戦線の反戦、反ファシズムは、日本軍国主義者にとって致命的な脅威になりかねず、上述の二回にわたる弾圧を行ない、検挙した人数は、四八六名に達した。第一回は、全国十八府県下で日本無産党の鈴木茂三郎・加藤勘十らをはじめ、全評の幹部、および日本共産党に対立して結集されたマルクス主義グループ労働派の山川均、猪俣津南雄、荒畑寒村、向坂逸郎らが、一斉検挙された。第二回には、東京帝大の大内兵衛・有沢広巳、法政大の美濃部亮吉・阿部勇ら労働派の理論家グループと、社会大衆党（三二年七月結成）の佐々木更三・江田三郎および全国農民組合（二八年五月結成）の左派幹部ら、合計三八名が検挙された。

大内兵衛・有沢広巳らを取調べる担当者であった、当時特高第二課係長宮下弘は、「われわれ警察官の側から

みれば、治安維持法に抵触しない合法の範囲内での運動をこころがけてきたグループまでを、一回の警告もなしにさあ検挙しろというのは感心しない、それは政治的な判断としてはあるだろうが、法治国家としては如何なのか、勝手すぎやしないか、わたしはそう考えていました。²⁾」という。そうでなければ、人民戦線事件の弾圧は、

非合法の共産党だけでなく、合法的に活動する自由主義者、平和主義者、民主政治家、宗教家などまで、戦争に反対するすべての人々が、弾圧の対象となるからである。

もともと、治安維持法（一九二五年四月公布）も、治安警察法（一九〇〇年二月公布）も、いずれも、民主運動・労働運動・農民運動を禁圧するために制定されたものである。軍国主義者は、自分の都合によってそれらの法規を悪用し、反戦運動の弾圧を強行し、人民戦線事件の直後に、日本無産党と全評に解散を命じた。他の「いろいろなグループが弾圧をさけるために自ら組織を解散させてゆき、なんらかの反戦・反ファッショ的活動を合法的に展開することはできなくなった。したがって、これ以後の反戦「ファッショ」の組織的運動は、非合法・地下活

動」を余儀なくされた、結局、弾圧によって壊滅してしまった。³⁾

しかし、一般民衆の間には、反戦意識が分散的ながら潜在しており、しばしば投書・落書・私語などの形で顕在化していた。⁴⁾だが、それさえも厳しい状況であった。

たとえば、一九三八年一月末に中央公論社の特派員としての石川達三は、華中戦線に従軍し、南京占領の跡を見て、帰国後に書き上げた戦争記事「生きている兵隊」を『中央公論』三月号に発表した。その内容は、典型的な下士官像、戦争に耐えきれぬインテリ兵などの兵士群像を鋭く描いている。これによって石川は、新聞紙法違反に問われ、有罪の判決を受けて投獄された。⁵⁾また、一九四一年、左翼思想と全く無関係のキリスト教反戦者である藤本善右衛門らも検挙された。藤本らは、獄中においても、「神は殺人行為を堅く禁ぜられている。それゆえ戦争は神の御心に反するのである」と堂々と述べ、あくまで戦争に反対していた。⁶⁾

このような自由も、民主もない暴政・テロの下に、団体だけでなく、個人の反戦活動も、事実上、不可能となった。その唯一の有効な方法は、日本から外国へと亡命し、外国において反戦運動を継続することである。こ

う考える人が、次第にあらわれてきた。一九三八年一月三日、女優岡田嘉子は新協劇団の杉本良吉とともに樺太（現在サハリン、当時北緯五〇度以南が日本領）へ渡り、国境を越えてソ連領内に姿を消した。同月六日付『東京朝日新聞』は、「謎解けぬ雪の国境、思想上の悩みか邪恋の清算か」としている。杉本は、プロレタリア演劇家である。コミンテルンとの連絡のため、ソ連に入った。共產党員ではない岡田は、「軍国主義のお先棒をかつがされる芝居に出なければならないことは、見えすいています。商業劇場の専属俳優にどんな自由がありませんよう」と、ソビエトへ逃げていった。つまり彼女は、日本では良心的演劇活動が困難となって苦しんだ結果、杉本とともに越境を決意し、反軍国主義、反戦運動に参加したといつてよからう。

他には、当時、ファシズムに反対し、自由・民主にあらがれ、米国に在住した作家石垣綾子も、日中戦争をきっかけに、アメリカで積極的に戦争反対運動に参加し、日本軍国主義者の暴行に非難を加えた。彼女は、

ロマアゼルからニューヨークにもどってくると、私は全米各地の教会や市民・婦人団体、大学などに招かれて反戦のアピールをし、のちに述べるように

「平和と民主主義同盟」の全国大会に招かれて日本の侵略に抗議した。日本本土をおおうファシズムの現状を話し、日本人の敵は中国ではなく、日本軍部であることを訴えて、その戦力を弱めるために、日本品のボイコットと日本向け資材の輸出禁止運動を推しすすめていった。という。さらに、

日本の商品のボイコット、日本向け戦略物資の輸出停止の呼びかけ、中国への医療や難民救助の資金を集めるために、いろいろな団体が作られた。私の反戦活動は、こうした世論を背景に大きくひろがり、「中国友の会」や「中国救援会」の斡旋を通じて、アメリカ全土を東へ、西へ、南へと、飛び歩く歳月がつづいた。

と述べている。

日本軍国主義に反対し、中国支援に尽した石垣は、日米開戦後の一九四二年六月にアメリカのOWI（戦時情報局）に入って働くことになった。日本向け短波放送やビラ・パンフレットを書き、日本軍将兵、市民に反戦をよびかけた。このような反戦活動は、国際的に高く評価されている。

さて、当時、中国における日本人の反戦運動については、いったい、どうなっていたのか。

中国での日本人反戦団体は、二つのグループに分けられる。一つは、重慶の国民政府に協力する鹿地亘を代表とする反戦組織である。いま一つは、延安政府に協力する野坂参三（岡野進）を代表とするものである。これらを述べるについて、まず中国の国共両党の抗日統一戦線の結成を説明しておく。

二 国共両党の抗日統一戦線の結成

周知のように、一九二七年四月一二日に、上海で起った蒋介石の反共クーデターは、中国々民党と中国共産党との分裂を、事実上、決定的なものにした。その後、国共両党の内戦が開始し、ずっと三十七年七月に日中戦争が勃発する時まで続いた。三五年八月一日の中共中央の「抗日救国のために全国同胞に告ぐるの書」と題する、いわゆる「八・一宣言」の内容は、前述のコミンテルン第七回大会の全世界反ファシズム人民戦線結成のよびかけと、同一の性格を持っていると見られる。

八・一宣言の影響の下に、国民党左派の代表孫文未亡

人宋慶齡らをはじめ、左翼文化人、労働者、学生および一般民衆は、内戦停止、一致抗日を、国民政府の蒋介石に要求した。これに同調した東北軍司令の張学良と、西北軍司令の楊虎城らは、三六年十二月一二日に、西安において蒋介石を逮捕・監禁した。これがいわゆる「西安事件」である。この事件は、実は、「逼蔣抗戦」（蔣にせまって抗日させる）である。結局、張学良らの内戦停止、連共抗日の要求を黙認した蔣は、やっと釈放された。この西安事件によって国共両党の抗日統一戦線結成の道が開かれたと考えられる。

盧溝橋事件直後の七月十七日、蒋介石は盧山で談話を発表した。この談話は、抗議するという方針を確定した。この確定に対する中共は、断固として支持する旨を表明した。八月二五日、中共中央政治局の拡大会議で採決された「すべての力を動員して抗戦の勝利を勝ち取るまで戦おう」という文句を掲げ、一、日本帝国主義の打倒、二、全国の軍事総動員、三、全国人民の総動員、四、政治機構の改革、五、人民生活の改善、六、抗日の民族團結などの十大綱領を実現させなければならないと訴えた。また、「中国共産党は、自己の一貫した方針のもとに、中国々民党および全国の他の諸政党と同じ戦線に立ち、

手をたずさえて団結し、民族統一戦線のかたい長城を築き、極悪な日本侵略者に打ち勝ち、独立、自由、幸福の新中国のために戦うことを願うものである」としている。¹²⁾

それと同時に、国共両党の協定に基づいて、中国共産党の赤軍三万余が、国民革命軍第八路軍（第一八集團軍）に改編され、司令に朱徳、副司令に彭徳懷が任命された。また、揚子江中流の南北地区にゲリラ戦を行っていた赤軍の一万余も新四軍に改編され、軍長に葉挺、副軍長に項英が任命された。全面抗戦を推進するため、国民政府の国防最高會議が設けられた。この會議の中共側の代表は、周恩来、朱徳が選出された。ここに国共両党の抗日統一戦線が、名実ともに達成されるに至ったのである。

統一戦線の結成に伴い、無論、蒋介石の反共政策や左翼の弾圧が、自然に解消してしまった。かつて国民党支配地区で自由に活動できなかったプロレタリア文化人や左翼活動家らが、再びあらわれて抗日運動に積極的に参加した。その中で、注目されるのは、前述の二七年蒋介石の反共クーデターによって日本に亡命していた郭沫若の帰国である。

郭沫若は、一九二七年九月に江西省瑞金にある小学校で賀竜とともに中共に入党した。入党の紹介人は周恩来

であった。¹³⁾ やがて、中共の赤軍が広東省汕頭で撃破され、郭は、同年一月初旬、密かに上海にもどったが、蒋介石の逮捕命令の下に、上海に居留するのは危険であった。一九二八年二月二十四日、郭は、呉誠と変名して日本郵船「盧山丸」に乗り、日本へ亡命した。上海から神戸に着いた時、出迎えにきた日本人は、内山完造であった。¹⁴⁾

その後、郭は千葉縣市川に住んで、三七年までの約十年間を中国古代社会の研究に専念しながら、左翼作家・文化人らとの関係も持ち続けていた。したがって、終始日本の特高警察の監視下におかれていた。盧溝橋事件勃発直後、特高のはりこみの目をくぐって千葉から神戸へ行き、神戸に寄港したカナダ汽船に乗って上海に帰った。時は三七年七月二十七日であった。中国文芸協会上海分会と、上海文化界救亡協会は、共に郭沫若帰国歓迎パーティーを開き、友人の沈尹默、張菊生、郁達夫、夏衍、阿英らは、再会を喜び旧交をあたためた。八月十三日、日本軍の上海進撃がはじまり、戦局がいっそう悪化した。郭沫若は、周恩來の指示によって夏衍らとともに、上海文化界救亡協会の機関紙としての『救亡日報』を、同月二十四日に創刊した。社長は、郭自身、主筆と主編は、夏衍と阿英であった。この新聞は、実は、国共両党の抗日

統一戦線の下に生まれたものである。当時、上海に滞在した著名な進歩人士といえば、宋慶齡、何香凝、鄒韜奮、鄭振鐸らのほかにも、なお文学界、演劇界、社会科学・映画の諸分野の人たちがおり、こぞって『救亡日報』に寄稿した。同紙は、反戦運動、抗日運動の推進に重要な役割を果たした。やがて上海の戦局が緊急を告げ、『救亡日報』は広州、さらに桂林へと移転しつつ発行を続けた。

郭沫若は、広州での『救亡日報』のすべてを夏衍にまかせ、みずからは、武漢へ赴いた。武漢の八路軍駐武漢事務所において、周恩来をはじめ、葉挺、王明（陳紹禹）葉劍英、博古（秦邦憲）、鄧穎超らと歓談し、今後の活動方針を話した。当時、国民政府軍事委員会政治部々長は、陳誠（蔣介石の直糸）、副部長は周恩来である。政治部の下に、三つの庁があり、その中の第三庁は、対日宣伝の機構である。周恩来は、郭沫若を第三庁々長に積極的に推薦したので、ついに郭は、第三庁の庁長に就任した。

庁長となった郭沫若は、周恩来、董必武、秦邦憲、陽翰笙らと相談した結果、第三庁を中共の中核として、民主党派、民間団体およびすべての進歩勢力を吸収して抗日統一戦線の機構を充実させようとした。ことに対日宣伝は、ただ日本留学生だけでは力不足であり、日本の進

歩的知識人の協力は欠くことができない大きな力であった。したがって、鹿地亘らの中国抗日統一戦線への参加は、当時、コミンテルンの反ファシズムの一面であったのである。

三 中国での鹿地亘

一九三〇年代における日本の進歩的知識人の多くが上海で暗躍していた。尾崎秀実をはじめ、鹿地亘、山上正義、西里竜夫らは、中国の左翼作家である夏衍との交友関係があった。

夏衍は現代中国の劇作家。本名は沈端先、浙江省杭州に生まれた。一九二一年一月、北九州の私立明治専門学校（今の九州工業大学）に入学、電気工学を学びながら、マルクス主義に関する書物に接して社会運動に加わった。二六年三月、明治専門学校を卒業した後、東京で日共中央委員の渡辺政之輔に会見し、日本の左翼との関係が結ばれた。二七年四月、日本特高に追われ、彼は上海に帰った。同年六月か上海で中共に入党した。⁽¹⁶⁾その後、彼は、馮乃超らと、「上海芸術劇社」を作り、プロレタリアート新劇を提唱するとともに、中国の左翼文化運動に

波長を合わせた演劇雑誌『芸術』と『沙侖』などを創刊した。三〇年五月二〇日、魯迅を中心にして「左翼作家連盟」を結成した際、彼が同連盟の執行委員に選ばれた。同年八月、彼は、さらに「左翼戲劇家連盟」の結成に着手した。つまり三〇年代における上海で最も活動した左翼作家は、夏衍であったといつてよからう。

盧溝橋事件後、上海に滞在する日本人左翼作家は、軍部のテロによって日本に帰国することはきわめて危険であった。日本軍が上海を占領すれば、彼らは他地へと逃げなければならぬ。当時、窮境に立たされた一人は、鹿地亘である。

上海陥落前のある日、夏衍は上海北四川路の内山書店で鹿地に出会った。その時のことについて、夏は次のように述べている。

たまった本代を返済するため、内山書店へ行き、そこで、突然鹿地亘夫妻に出会った。二人は、私をつかんで離さなかった。というのは、北四川路一帯ではすべての日本人が鹿地夫妻を反戦、親中国者と知っており、家主は不祥事件の惹起を恐れて、これ以上、日本人住宅区に住むことは、困難だったからである。しかも貧乏しているので、家賃さえもない。

何とかしてほしいのは、安全な場所に住みたいということである。これは誠に困ったことだ。日中両国の全面戦争の時期に、怒り狂った一般民衆は、日本人と見さえすれば、殴ろうとしている。日本人夫婦を受け入れてくれそうな人が、誰もいない。ちょうど困っている矢先に、内山完造が私にヒントを与え、外国人の友人の中に手伝ってくれる人はいないかといった。当時、スメドレーは、すでに北中国へ行っており、ポーランド共産党のシュューベルトは、親しいが、彼自身も工部局に監視されている。そこで、なにはともあれ、まずタクシーを呼び、鹿地夫妻を連れてフランス租界の“Voice of China”のグラニーニッチの家へ行った。二人の苦境を知るとグラニーニッチとその太った夫人は、「どうぞ、私たちのところに住んで下さい」と喜んで受け入れた。鹿地と池田は、涙を流して、私と別れた。

上海陥落直前、郭沫若をはじめ、夏衍らは、上海を離れ、香港を経由して広州へ赴いた。広州に着いた郭は、市内の新亜ホテルに泊った。その時、日本で弾圧を受け、その苦しみに堪えなかった緑川英子夫妻が郭を訪ねてきた。緑川の本名は長谷川照子である。かつて日本に留学

した劉仁と結婚し、盧溝橋事件後、日本から上海へ亡命した。日本軍の上海占領暴行を見て、目に余った彼女は、「愛と恨」と題する文を書き、中国の雑誌『中国怒吼』に掲載し、大きな反響を呼んだ。広州で郭沫若に会見した彼女は、自分に中国抗日統一戦線に参加し、対日宣伝のことを担当させて欲しいと申し込んだ。郭は、彼女を推薦して国民政府の放送局に勤務させ、日本の将兵・市民への反戦を呼びかけさせた。三八年十一月一日付の東京『都新聞』は彼女を「うぐいす売国奴」と罵倒した。

上海から広州への途中で、香港に立ち寄った郭沫若は、鹿地から彼あての一通の書信を受け取った。内容は「上海で敵の迫害を受け、すでに夫人の池田幸子といっしょに香港に逃げて来ている、しかし生活のあてがない、なんとかしてほしい」という。当時、郭は、まだ第三庁々長になっていなかったもので、すぐ返事していなかったが、このことを心にとめていた。武漢に着くと、第三庁々長に就任した郭は、対日宣伝には、日本の友人の手を借りなければならぬと考えた。そのため、ある日、上官の宣伝部長の陳誠に、鹿地亘は日本の反戦作家で、帝国大学を卒業し、馮乃超と同期であった、現在、彼は迫害を受けて、香港で亡命生活を送っている、もしわれわれが

彼を招けば、きっと来てくれるだろうし、われわれに大きな援助を与えてくれるに違いないと、積極的に推薦した。これを聞いた陳は、大いに同意した。そこで、郭はただちに電報を広州にいる夏衍に打った。わずか一週間後に、鹿地夫妻が武漢に到着した。その頃、鹿地は「国民の総意」との論文を書き、日本軍国主義の打倒、侵略戦争反対を痛烈に訴えた。この論文は漢訳され、当時武漢の中共機関紙『新華日報』に発表されて中国各界に大きな反響を呼んだ。中共中央・八路軍駐武漢代表周恩來は、鹿地夫妻をはじめ他の在武漢の国際友人たちと共に招いてレセプションを開催し、感謝の意を表した。また鹿地夫妻は第三庁の企業委員に招かれ、事実上、第三庁第七処の顧問となった。

武漢陥落後、第三庁は戦時首都である重慶へ移った。その後、鹿地夫妻は、終始、郭沫若に協力して抗日反戦運動に力を尽したのである。

四 鹿地反戦グループ

中国における日本人の反戦運動は、きわめて多面的であったが、おおざっぱにいうと、次のような諸点を挙げ

ることができる。すなわち、一、戦地で日本将兵に反戦を呼びかける、二、短波のラジオにより日本国内および占領地域日本軍向けの放送、三、演劇巡回公演により中国軍民の抗戦を激励する、四、ビラやパンフレットの作成、五、捕虜の思想教育、六、日本側の情報を収集し、またそれを調査研究することなどである。その中で、より重要、また困難なことは、捕虜の思想教育である。戦争開始後、国民党軍側も、八路軍側も、どちらにも日本軍の捕虜がいた。彼らをどう取りあつかうべきかは、一つの難問である。三十七年一〇月二五日、毛沢東とイギリス人記者パートラムとの談話によれば、毛は、

われわれはやはり、捕虜になった日本の兵士や戦うことを強要された下級幹部たちを寛大にとりあつかい、はずかしめたりどなりつけたりせず、彼らに両国人民の利益が一致していることを説明して、彼らを釈放してやります。帰りたいくないものがあれば、八路軍のなかで勤務してもいいのです。将来、抗日戦場に「国際部隊」があらわれれば、この軍隊に参加して武器をとって日本帝国主義とたたかうこともできるでしょう。⁽²¹⁾

と、いつている。したがって、中共中央と密接な関係に

ある第三庁は、毛の指示によって日本軍捕虜の思想教育に力を入れた。当時、国民党軍側の日本軍捕虜収容所は、いくつもあった。華中以南地区の収容所としては、湖南省常德に設けられていた。鹿地は、郭沫若の依頼によって常德へ行き、同地で「平和村」(収容所)の思想教育を行なった。多くの困難を戦いぬき、最後に、捕虜になった灘の醸造労働者であった森本清をはじめ、いく人かの反戦の仲間を得た。⁽²²⁾

三九年一〇月、広西省桂林にある臨時捕虜収容所から解放された十一名の捕虜兵士は、鹿地とともに「在華日本人反戦同盟西南支部準備会」を結成し、機関紙『人民の友』を発行した。同年十二月二五日に、桂林において最初の『在華日本人反戦同盟』の西南支部を発足させた。あたかもその時、日本軍第五師団今村均の部隊は、広西省南寧北東の昆侖関で国民党軍と激戦を展開していた。反戦同盟西南支部の日本人たちは、鹿地の引率の下に前線に出動した。鹿地は、

二カ月余にわたる火線宣伝工作で、中日戦場における日本人反戦運動の火蓋をきり、やがて砲火の中で生命を日中両国人民の結びと平和にささげた鮎川、大山、松山の三同志を銘記しないわけにはいかない。

そのうち松山は本名を陳松泉という台湾人の軍属（通訳）出身であったが、鮎川と大山は出身地が東京とわかっていただけで、ついに本名は残されていない。けれども彼らの流した血は当時中国戦場の全域を湧き立たせ、反戦同盟のいしずえを永遠に赤く染めている。⁽²³⁾

と述べている。

昆仑関、すなわち桂南の戦は、日中双方の死傷もひどかった。反戦同盟西南支部の日本人の反戦情熱と、国際反ファッショの連帯感が、佐々木正夫の「血の指標——桂南前線工作記——」との文に克明に記されている。⁽²⁴⁾ 反戦資料として評価できる記事である。

のみならず、四〇年の春、反戦同盟西南支部では、組織整備と休養を機会に、全員で劇団を組織し、桂林での公演をはじめた。鹿地亘作「三人兄弟」(二幕劇、夏衍訳)をもって国民党軍各部隊の間に巡回公演を行い、大いに反響を呼んだ。同年三月十四日付の桂林の『救亡日報』は、「日本人の反戦をもって中国の抗議を推進し、中国の抗戦をもって日本人の反戦を支援する。これは、目前東アジア両大民族の共同要求によったものである」とほめたたえた。また同月二二日付の重慶『新華日報』

も「今日、中国の劇壇、日本人民の劇壇、また全世界の劇壇において、一輪の美しく、鮮やかな血の花が咲いており、日中両民族は、ただ一つの共同敵人しかない。そして圧迫された人たちと、侵略された人たちとは、手を携えてその共同敵人を打倒せよ」と、述べている。

鹿地の反戦グループである「在華日本人民反戦同盟」西南支部の基に、四〇年七月二〇日に重慶で反戦同盟總部が創設され、「日本ファッショに反対し、日本軍閥を打倒し、非侵略的人民政府を樹立して中国人民とともに真の平和を実現させるため、努力せよ」という方針が決定され、鹿地が反戦同盟總部の会長に選ばれた。当時、同總部の盟員は二十一名、西南支部の盟員は十七名であった。その中の多くは、解放された日本兵士と在留日本人である。また、日本人の従軍慰安婦である浅野公子と岡村利子らも含まれている。⁽²⁵⁾

その後、「在華日本人民反戦同盟」が、いっそう発展して行き、中国各地に支部があい次いで生まれた。反戦同盟重慶總部の機関誌『真理の闘い』が発行され、反戦の氣勢がいっそうあがっていったのである。

一九四〇年九月、日独伊三国同盟結成によって、日中戦争はいよいよ太平洋戦争へと発展して行った。それと

同時に、中国戦場における日本軍の圧力が緩やかになったのか、国民党の反共色が、あらわれてきた。翌四一年一月、安徽省（皖）南部にいた新四軍九千余が、黄河以北に移動した際、突然、待ちぶせていた国民党軍八万余に襲撃された。軍長の葉挺は捕われ、副軍長の項英が戦死し、全軍がほぼ潰滅状況に陥っていた。これが、いわゆる皖南事件である。この事件によって国共両党の抗日統一戦線が、事実上、崩壊してしまったと考えられる。

皖南事件前の四〇年九月、国民党は、第三庁の左翼勢力を肅清するため、庁長の郭沫若を排出した。政治部第三庁は、名実ともに、国民党一党独裁の機構の体勢になった。⁽²⁶⁾ 初代政治部々長の陳誠は、張治中に変えられた。しかし、文化界全体を敵にまわすのを恐れた張治中は、郭沫若およびその幹部を慰留するため「文化工作委員会」（主任は郭沫若）を設け、彼らをひきとめた。文化工作委員会は、鹿地らの反戦同盟の後見を担当し、馮乃超が組長になった同委員会の敵情研究組には、反戦同盟が協力し、そこから発行された『敵情研究』誌に同盟員の研究論文や座談会記録など多くの文章が掲載され、高く評価された。

それにもかかわらず、国民党の公然たる反共への転向

によって、反戦同盟の活動はきわめて困難な局面に立たされていた。このことについて、鹿地は次のように述べている。

皖南事件のあとを受け、国民党政府の公然たる反共への転向、国内的には内戦、対外的には降敵の危機が頂点に達する状況の中で、日本人民反戦同盟は解散を命じられ、重慶総部と西南支部の全員が、郭沫若その他の中国の同志やわたしたちからもぎ離され、貴州省鎮遠の山中の收容所（平和村）に運びこまれた。戦場や大後方（国民党地域）での自由な活動条件を失った同盟員は、ただちに看板を平和村訓練班と改め、收容所内の四百たらずの捕虜を目標とした活動に移ろうとしたけれども、国民党当局が竹矢来の柵を設けて、一般捕虜の住む後院（または後倉）と反戦分子のおかれた前院（前倉）を遮断し、接触を許さなかった。接触を嫌ったのは国民党当局だけでなく、捕虜の間のボス連中もなかまに統制と監視を加え、「彼らと自分たちとは考えがちがう」という理由で、両者の自由な交流の禁止を当局に申し入れ、また「革命」の看板の下に国民党特務が養成した「日本民主革命同志会」のグループも「不合作方

針」で堅く蓋をとざし、同盟を寄せつけようとしたかった。⁽²⁷⁾

このような状況の下、鹿地の反戦グループの活動は、大いに制限されたのである。

しかし、太平洋戦争後、中国戦場での捕虜が増加しはじめた。その時、収容所は、もはや収容数の限度に達しており、新しい捕虜たちは訓練班や同志会のグループがいる前院に次々に送りこまれてきた。訓練班（反戦同盟）は、ようやく活動対象を見出した。⁽²⁸⁾

一九四三年十二月、鹿地は、重慶における政治部内の研究室に旧反戦同盟員数名を増員した。それと同時に、貴州省鎮遠の収容所に出かけ、捕虜の全員に対して、戦後の展望および「日本民族解放同盟」の組織方針について訴えた。同所内では、訓練班が中心になり、長谷川敏三らが率いていた新しい捕虜グループを加え、日本人民全体を対象とした統一戦線の運動「新生活協会」をおこし、機関誌『平和先鋒』などを発刊した。彼らの研究調査および座談会などの成果である「最近の日本軍戦線を語る」、「日本軍作戦の苦悩を語る」、「逃亡、自殺、反乱」および「日本軍暴行調査」との論文・記事が同誌に掲載され、当時、郭沫若の主持する政治部文化工作委員

会の敵情研究組の貴重な参考となり、抗日反戦に大いに貢献した。

だが、訓練班や新生活協会などのさまざまな組織では、国民党地域で決して思うままに活動することはできなかった。中共と八路军に協力を得て、「日本人反戦運動はこの時期から、辺区および華北の各根拠地において、めざましい展開をもつことになる。やがて一九四四年に入って、これらの各地の反戦同盟は岡野進（野坂参三）の指導下に、終戦を迎える体制をととのえて、日本人民解放運動に改組される。重慶方面でもこれに呼応しつつ、日本民族解放同盟（延安と気脈を通じていると受けとられることからくる政治的障害を避けて、名称を変えた）の計画を進めたけれども、国民党支配下では、それはついに実を結ばなかった」と、⁽²⁹⁾鹿地は指摘している。

では、中共支配地域下の野坂参三の反戦グループの活動については、どうであったのであろうか。

五 野坂反戦グループ

一九四〇年のはじめ、モスクワにいた野坂参三は、「中国の戦場で軍閥とたたかい、日本兵の捕虜に革命的

な教育をすることは大きな意義がある」と考え、コミンテルンの援助を得て同年四月頃にソ連から中国へ赴き中共の根拠地である延安に到着した。中共の長老林伯渠が老軀をひきさげて途中まで野坂らの一行を出迎えていた。その歓迎の情熱があふれていた。

延安に着いた野坂は、ソ連から着てきた洋服をぬぎ、普通の兵隊の木綿服に着換えて皆の前に出ると、毛沢東は、「よく似合う」と笑ったといわれている。その時から野坂は八路軍中の一人の「老兵」となった。

延安での野坂らの反戦内容とそのやり方は、重慶における鹿地らとほぼ同様である。しかし、延安と重慶との政治的ふんいきとその革命的理念が著しく違うので、野坂らの反戦運動の推進は、鹿地らよりはるかにうまくはかれたのは、いうまでもない。

毛沢東の依頼によって野坂は八路軍政治部に属し、対日本軍政治工作を指導した。当時、同政治部に日本問題研究室もあった。その研究の仕事を全面的に引き受けた野坂は、まず、日本の軍事、政治、経済、社会の実情を調査研究することに着手し、多くの成果をあげた。なぜ、このような調査研究をしたのか、野坂は、「日本の勤労人民の敵は、日本の軍閥であり、これを打倒して日本を

民主々義化することが、われわれの任務である。同様の目的を中国共産党や八路軍ももっている。したがって、共同の目的のために、われわれは共同してたたかう必要があるからである」と、いう。

延安では、『敵情資料』という中国語雑誌を、八路軍政治部から発行した。その創刊号に、野坂は日本国内の政治情勢を分析した論文を書いた。かつてこのような詳しい論文を読んでいなかった中共の幹部たちは、みんなおどろいた。同論文に野坂が署名していなかったのか、

「王学文が書いたんだ」とのうわさが流れた。王学文という人は、かつて京都帝大の河上肇の下で『資本論』を学んだ中国人留学生であった。延安にいた野坂を手伝って翻訳のことに従事した政治部の「敵工」係長であった。

調査研究、新聞雑誌発行、対日本軍宣伝などの諸活動より重要なのは、日本兵捕虜の思想教育だと野坂は考えていた。これは鹿地の意見と同一である。しかし、当時、八路軍内は、捕虜収容所のような特殊な施設はなく、また、捕虜に勤労を強制するようなこともなかった。彼らの日常行動は自由であった。日本軍に帰りたいと要求した捕虜たちは、みんな送り返された。必要な時に旅費を支給し、負傷者に対して親切に医療を加えた後、送り返

した。もし中国にとどまり、または八路軍や新四軍で働くことを希望するならば、中共当局は、彼らに適当な仕事を与える。このような捕虜優待政策は、前掲毛沢東と英人記者バートラムとの談話、および八路軍総司令の朱徳・副司令の彭徳懷から出された「捕虜を殺さず、帰りたいものは釈放して帰らせる」という六ヶ条の命令によって明らかにされている。

統計によれば、一九三八年六月から四一年五月にかけての、八路軍・新四軍の日本軍捕虜の合計人数は、一、七七一名に達している。そのほか、三一名が自発的に降伏した。⁽³⁴⁾捕虜の多くが、希望にしたがって釈放された。注目されるのは、一九三九年一月二日、山西省武郷県王家裕村で行なわれた八路軍と日本軍捕虜との新年パーティで、日本軍捕虜である杉本一夫（本名は前田光繁、京都の人）、小林武夫、岡田義雄ら三人が喜んで日本軍籍を捨てて八路軍に入隊したことである。これは、⁽³⁵⁾盧溝橋事件後に八路軍となった最初の日本軍捕虜であった。さて、前述の日本軍捕虜の思想教育を重視した野坂は、当時八路軍政治部長の王稼祥に、日本軍捕虜の学校を作ろうと申し入れた。この計画に大いに賛成した王部長は、王学文らを遣し、野坂に協力して延安の中心にある「宝

塔山」という小山における学校建設の用地を決めた。そうして一九四〇年十一月に至り、野坂らの計画した捕虜である「日本労農学校」を創設することができた。

校長は野坂で、副校長は李初梨である。教師は日本語の話せる中国人、たとえば王学文らである。学生は、前線にいる日本兵捕虜と八路軍や新四軍を助けて宣伝工作をやっている捕虜の一部を延安に呼んで、学校に入学させた。

学校の目的は、第一には、日本兵士が日本軍国主義者の侵略戦争を「聖戦」と見なしている誤った思想を打破することにあった。さらに進んで、学生の中から日本軍に対して政治工作を行なうことのできる幹部を養成することであった。学生の主旨を表わすため、学校の校訓には、「平和、正義、友愛、勤労、実践」の五項目が、掲げられている。⁽³⁶⁾

創設当初、学生はまだ二十名足らず、その多くは、捕虜であった。当時の情況について、野坂は次のように述べている。

一番大きな洞窟を教室にした。内部は白いシツクイで塗られ、明るかった。狭い机と長い腰かけが十ばかりならんでいる。私が行くまでに学生は、どんな

校長が来るかと、好奇心を持って待っていた。私が教室に入ったとき、彼らは複雑な表情をもって私を迎えた。というのは、彼らは、まだ捕虜の意識をもっていたうえに、共産主義や共産党については全く知らないか、あるいは偏見や憎悪をもっており、また彼らの将来は不安であったからである。しかし私が話をしているうちに、彼らの表情も少しずつ変わらぎ、中には熱心に耳をかたむけはじめたものもいた。これから、いよいよ軍国主義者から平和と民主の革命家への人間改造のむづかしい仕事が始まった。³⁹⁾

このような状況の下に、まず学校は、学生の生活と行動に完全な自由と、校内での、学生に自治を与えた。学習の面では、日本語で内外時事の分析、世界地理・経済学入門などを教えながら、軍国主義者の侵略性格を解明した。また、各種の討論会を行ない、学生たちの考えや意見を自由に発表させた。暫くすると、彼らの人生観や戦争に対する認識が次第に変わっていき、ついに戦争反対の思想が生まれてきた。学生の学習意欲が高まるにつれて、学生の大部分は、彼らの組織した「反戦同盟」に参加した。同盟で彼らは、思想上の鍛練を受け、ついに少

数の積極分子を生み、校内の活動および校務、課業などのすべては、彼らの手で指導されて行なわれるようになってきたのである。⁴⁰⁾

一九四二年六月二三日、延安で「在華日本共産主義者同盟」が成立した。これは、野坂をはじめ、「日本労農学校」の一部の学生らの努力によったものであるといつてよからう。同盟成立の翌々二五日、毛沢東は林哲、すなわち野坂参三にあて書信を送り、大いにほめたたえた。その書信の邦訳は、以下である。

今日、在華日本共産主義者同盟成立の知らせをうけて、非常にうれしく思います。私は同盟の諸同志とまったく同じ気持ちです。同盟が私に手紙をくださったことに心から感謝します。いま、華北日本将兵代表大会もまもなくひらかれようとしています。私は心から大会の成功を祈ります。大山同志のいうように、華北にある数十万の日本の兄弟たちは、かならず大会のよびかけにこたえて、日本のファッシヨ侵略者に反対し、中国人民とともに共同の敵を打倒するために奮闘することでしょう。同盟と大会のあらゆる革命活動はすべてあなたの指導のもとにあります。中国共産党はあなたと一切の日本革命同

志の革命活動に全面的に同意し、できるかぎりの力をつくしてあなたがたを援助します。このことを同盟の諸同志につたえてください。中日両国人民の団結奮闘のためにあいさつをおくります。

毛沢東

一九四二年六月二五日

同年八月十九日、「全華北兵士大会」および「反戦同盟華北大大会」が延安で召集された。この二つの大会は、「日本労農学校」の学生たちが召集し組織し、指導した。さらに一部の学生は、全教課過程を学び終り、前線へ赴き、八路軍の対日本軍作戦に参加して輝かしい成果をあげた。前掲の毛沢東の「抗日戦場に『国際部隊』があらわれゝば」という予言が、ついに初步的に実現したものと考えられる。

労農学校は日本軍に反戦を呼びかけるため、多くのビラをまいた。その中の一枚には「我々の大部分は激戦の後八路軍の捕虜となったものだが、捕虜となった時、我々は当然殺されるものと覚悟していた。ところが、八路軍は我々を殺さなかった。殺さなかったのではなく、我々を捕虜、又は敵兵として虐待したり、侮辱したりしないで、友人として、兄弟として待遇してくれた」、「八

路軍が今日たたかっている敵は、戦争を起し、戦争から莫大な利益をあげている日本の軍部と資本家と大地主とであって、一般の兵士ではない。日本の兵士の大部分は無産者であって、彼等は戦争から一銭の利益もえていない。むしろ戦争のすべての犠牲を負わされているのは彼等である」と、したがって、「今や我々は、戦争の惨禍と現在の暴政から日本国民を救い出すために全力をつくしてたたかうことを決意している」、「こんな戦争で犬死するな！ 勇気を出して八路軍に來たれ！ 來たて真理を学べ！」と、日本軍に呼びかけている。このビラを読んだ一部の日本兵士は、自殺、逃亡、また八路軍や新四軍に降伏したといわれている。

さて、前述のように、皖南事件後、国民党軍管内の鹿地反戦グループの活動は、大いに制限され、日本人民反戦同盟も解散させられた。後に、結成した「日本民族解放同盟」も依然として順調に行かなかった。結局、反戦の中心を延安に移さなければならなかった。一九四四年二月、日本人反戦同盟拡大会議が延安で召集された。その時、「日本民族解放同盟」は「日本人民解放連盟」に改組された。⁽⁴³⁾ また大会で野坂参三、森健（本名は吉積清）、杉本一夫らが、委員として選出された。⁽⁴⁴⁾ それと同時に、

一、戦争の終結と講和、二、恒久的な平和、三、富強的な経済政策、四、軍部独裁の打倒、五、自由民主的政治の樹立、六、人民生活の改善、七、兵士と兵士の家族の生活の保証、八、人民政府の創設などという八ヶ条の連盟綱領草案が起草された。⁽⁴⁶⁾ この綱領から見ると、「日本人民解放連盟」は、日本の軍閥・財閥・大地主を打倒し、戦争をいち早く終結させ、自由、民主、平和の新しい日本を築いていかなければならないと示されている。

盧溝橋事件後、中国戦場での日本人の反戦運動は、鹿地反戦グループの「在華日本人民反戦同盟」を始めとして野坂反戦グループの「在華日本人民解放連盟」結成へと発展していった。当初、反戦運動に参加した捕虜は、わずか数名しかなかったが、後には数百名に増加しつつあった。もし日本軍国主義者が戦争を継続するならば、反戦日本軍の捕虜人数は、日増しに拡大して行ったのではあるまいか。つまり、戦争を起す軍閥は、最後には、平和主義者に「降伏」しなければならないというのである。

おわりに

盧溝橋事件前における日本国内の反戦、反ファッショ運動は、治安維持法などによって鎮圧された。共産主義者はもちろん、左翼の作家、進歩的学者およびキリスト教社会主義者らさえも徹底的に検挙された。ことに、近衛内閣の国民精神総動員実施要綱の発令後、日本国内の反戦運動は、事実上、完全に停滞の窮状に陥っていた。

反戦運動家たちは、やむをえず外国へ亡命し、外国で反日本軍国主義・反独裁政治運動を続ける以外に手段はなかった。とりわけ共産主義者たちが、反ファッショの抵抗闘争の先頭に立ったのは、注目に値する。

いうまでもなく、当時中国は、中国での日本人反戦運動を積極的に支持したが、自国内の事情によって、日本人の反戦に多かれ少かれ影響を与えた。もともと、日本軍国主義者の侵略に反抗するため、国共両党の統一戦線が再び結成した。しかし、両党間の相互矛盾とその対立は、決して消え去っていなかった。両党の関係が、日本の軍事的圧力の強弱に従って変化していった。つまり、外圧が強ければ強いほど、両党の団結が固まって行き、

さもないと、両党の矛盾と対立が、次第にあらわれてくる。このような現象は、一九四一年の冬、太平洋戦争の勃発によって裏付けられた。

鹿地らの中国への亡命は、コミンテルンとの関係であるというよりは、むしろ郭沫若と夏衍との個人的関係だといってよからう。つまり、周恩来→郭沫若→夏衍→鹿地がこのような人間的関係と共同的理想に基づき、国民党軍管内で肩を並べて共同の敵人と戦かった。

周知のように、国共両党第一回統一戦線（一九三七年）の時、蒋介石と周恩来、また周恩来と郭沫若とのそれぞれの関係が結ばれた。周・郭二人は、いずれも国民党の仲間に入った。ことに国民党の左派との政治路線とは、ほぼ一致していた。盧溝橋事件後、国共両党第二回目統一戦線が結成してから、周恩来は、延安の中共代表として重慶に駐在し、蒋介石の国民政府との連絡役を果たした。皖南事件勃発のニュースが重慶に伝わると、周は重慶市の街頭に立って中共の機関紙『新華日報』を販売して国民政府に抗議を訴えた。にもかかわらず、日本軍国主義者の侵略を粉砕するまで、両党の再対決を、あくまで避けたいと、周は考えた。こういう状況の下に、郭沫若はもちろん、鹿地らさえも国民政府の都合に従わ

なければならなかった。当時、国民党軍管内での鹿地亘・池田幸子らの反戦運動の難しさについて、郭沫若は次のように述べている。

彼ら二人はその後中国に八年間留まり、終始抗戦と行動をとともにし、前期の宣伝工作に大きな援助を与えてくれた。しかし後期にはあらゆる束縛と迫害を受けた。実は遺憾なことであつた。⁽⁴⁶⁾

鹿地の反戦グループと対照的なのは、延安での野坂反戦グループである。

野坂が延安へ行ったのはコミンテルンの指示によつたものであつた。⁽⁴⁷⁾

延安は、当時、中共の政治中心地であるだけでなく、コミンテルン活動の舞台であつた。たとえば、米国婦人革命作家スmedレー（Agnes Smedley）、カナダ人の医師ベスーン（H.N. Behune）らは、みんな延安で八路军に支援し、反日本軍の侵略闘争に参加した。したがって、野坂の反戦活動は、コミンテルンの反スファッシュ運動の一環であつた。延安で、「日本共産主義同盟」を作つた時、野坂は次のように言っている。

この同盟は、同盟の規約にきめられているように、共産党ではなく共産党の準備組織である。同盟の当

面の任務は、共産主義的な教育と鍛練によって、日本人のあいだに真のボルシェビキをつくりだすことである。同時に、同盟は、中国にいる日本人にたいする共産主義思想の宣伝活動にも力をいれるだろうし、日本の同志がいまやっているいろいろな活動、たとえば、敵軍にたいする活動、日本人反戦同盟や学校での活動の推進力にもなるだろうし、将来は、さらにこの同盟が日本国内の革命運動を積極的におしすすめるところまで発展するだろう。⁽⁴⁸⁾

このような考えは、延安の『解放日報』に高く評価されたのに、重慶の国民党機関紙である『中央日報』はそれを完全に無視している。

中国の抗日戦争期における中国戦場での日本人の反戦運動は、共産主義者以外に、他の多くの平和主義者も含み、軍国主義者・ファシストと戦い、大きな役割を果たしたといわなければならない。中国戦場において、「戦線で死傷したり、再び日本軍に捕えられて重刑に処せられたりする危険を冒しながら、多数の反戦兵士が勇敢な活動が続けたという事実は歴史に残されるべきであろう。さらにこの反戦活動のなかで、目をさまされた兵士たちの多くが戦後の日本において人民の解放のために献身的

な活動が続けていることも特記しておきたい」と、戦争の体験者の一人である藤原彰氏は、指摘している。⁽⁴⁹⁾

また、海外での日本人の、自国の軍国主義者・ファシストに対する反対と抵抗については、いったい、どう評価すべきか、愛国者であろうか、それとも売国者であろうかということに家永三郎氏が次のように説明している。これらの人々の行動は、他の抵抗と異なり、「敵」と合体し「祖国」に反逆する外形を呈するのであり、戦時の正統道徳から見れば「売国奴」の行為であった。私はこれを特に「通敵抵抗」と名づけ、他の抵抗と区別したいと思うが、「不名誉な体制が祖国と同一化した」状況の下で抵抗者が「敵の友」とならざるをえなかったのは、世界の抵抗運動に共通する現象である。その場合、「不名誉な体制」に支配されている「祖国」の命令に従従することが決して真の愛国ではなく、祖国への反逆こそ真の愛国者のとるべき道となるというパラドックスが成立する所以を知らねばならぬ。もっともそのことは抵抗者をして「良心の苦しい葛藤」に悩ませるのを免れないであらうけれど、客観的にはまさに俗流のいわゆる売国が高次の愛国となるといって、悲劇的な愛国の形態

のありえたことを重視すべきである。⁽⁵⁰⁾

最後に、戦後五十年を迎えるわれわれは、上述の日本人の反戦運動を通じて、歴史の教訓を謙虚に学び、日本軍国主義思想の復活と、ファシズム侵略の再現を食い止めなければならぬ。今後の日本は、現行憲法の掲げている恒久平和の理念を守りつつ、中国をはじめ、アジア諸国、さらに世界のすべての国々と友好関係を促進し、日本人の知恵、能力および勤勉精神をいかして、二十一世紀の豊かな国際社会と、平和な世界を築いていかなければならない。そうだとすれば、日本人は、「好戦的な民族」との汚名を一掃し、その代りに、もっとも平和を愛する友好的な民族となるのではあるまいか。

注 釈

- (1) 犬丸義一著『日本人民戦線運動史』（青木書店、東京一九七八年）二二一頁によれば、第一次四四六名、第二次三八名が検挙され、日無党関係二六五名、全評関係一七四名、労農派グループ三四名、教授グループ十一名であった、と示している。
- (2) 宮下弘『特高の回想』（聞き手・伊藤隆・中村智子）一四七～一四八頁、田畑書店、東京、一九八〇年。また宮下は、「大内さんは、自分がマルクス主義者であ

ることも、マルクス主義学者であることも認めない。マルクス主義者であり、マルクス主義学者であるというのは、確乎として一貫不惑、マルクス主義を真理と信奉してゆるがず、立場を移さず、理論研究と実践とを一身に体現する、そういう人物なんだ、と言う。そういう観点から見ると、河上肇博士をマルクス主義者であるとは言えないんだ、と。そんな人間はどこにいるんだ、こちらはぜひぶん取調べてきたが、そんな人物にお目にかかったことがないと言うと、いや、いる、それは自分の知るかぎり榎田民蔵博士である。榎田民蔵は亡くなっているんですよ（笑）。」と述べている（同一四九頁）。

- (3) 同注（1）二二一～二二二頁。

(4) 家永三郎著『太平洋戦争』（第二版）二六八頁、岩波書店、東京、一九九四年。

(5) 「生きている」は、一九三八年七月に中国の作家である夏衍に漢訳され、広州で出版された。夏氏によると、この作品は、日中戦争という現実の中での日本兵の心理を描いたもので、当時、中国人に愛読され、一カ月以内に初版を売りつくし、再版も続いていたと、いつている。（夏衍著・阿部幸夫訳『ペンと戦争』「読者へのあいさつ」、東方書店、一九八八年）。

(6) 同注（4）二七〇～二七一頁。また、佐々木敏二「灯台社の信仰と抵抗の姿勢」（同志社大学人文科学研究所編『戦時下抵抗の研究Ⅰ』収録）参照。

(7) 共産党員である杉本良吉は、一九三三年（昭和八年）七

月に逮捕され、三六年二月に懲役二年執行猶予五年の刑を受けた思想犯である。一九七二年一月、岡田嘉子がソ連から帰国した時、宮本顕治日本共産党委員長は、一九三二年（昭和七年）に指導部がコミンテルンとの連絡に入ソするよう指令し、杉本はその任務を果たすため越境したと明らかにした（一九七二年の『日本共産党の五十年史』）。

- (8) 岡田嘉子著『悔いなき命を』一六九～一七〇頁、広済堂、東京、昭和四八年。

- (9) 石垣綾子著『さらばわがアメリカー自由と抑圧の二五年―』一七四頁、三省堂、東京、昭和四七年。同上 一七六頁。

- (10) 石垣綾子著『我が愛流れと足跡』一五九頁、新潮社、昭和五七年。

- (11) 『毛沢東選集』第二卷一七～二四頁、外文出版社、北京、一九七二年。

- (12) 張俠『南昌起義研究』三七九～三八二頁、上海人民出版社、一九八二年。

- (13) 龔濟民・方仁念『郭沫若伝』一三六頁、北京十月文芸出版社、一九八八年。

- (14) 夏衍「読者へのあいさつ」（一九八七年）、夏衍著・阿部幸夫訳『パンと戦争』収録、東方書店、東京、一九八八年。

- (15) 夏衍著『懶尋旧夢録』一二五～一二六頁、三聯書店、北京、一九八五年。

- (16) 左翼作家連盟結成準備のメンバーについて、夏衍は

「記憶によれば合計十二名、すなわち魯迅、鄭伯奇、馮乃超、彭康、陽翰笙、錢杏邨、蔣光慈、戴平万、洪靈菲、柔石、馮雪峰と私である。その中の魯迅・鄭伯奇を除外して、残りすべては中共黨員である」という（注（16）一四五～一四六頁）。

- (17) 同注（16）三九四頁。

- (18) 郭沫若著、小野忍・丸山昇訳『抗日戦回想録』（郭沫若自伝6）五三～五五頁、平凡社、東京、昭和四八年。同上。

- (19) 同注（12）四七～六五頁。

- (20) 鹿地亘編『日本人民反戦同盟闘争資料』七～一六頁「まえがき」、同成社、東京、一九八二年。同上 一一頁。

- (21) 同上四二～七七頁に収録されている。

- (22) 王庭岳『在華日本人反戦運動史略』六六～六七頁、河南人民出版社、一九八九年。

- (23) 国民党から見れば、政治部第三庁は完全に中共勢力に占められている。たとえば第三庁に発行された宣伝ビラに対して、「三庁の最近発行した宣伝文書には、つねに“人民”、“祖国”、“部署”等の文字が使われているが、これらの文字はきわめて穩当でない。“人民”すべて“国民”に、“祖国”は“国家”、“部署”は“職分”に改めるべきである。今後は対外的な文書はすべて政治部に提出し審査批准を受けた上で発行するものとする」（注（19）六五頁）と、訓令された。

- (24) 同注（22）一二頁。

(28) 同上。

(29) 同上。一五頁。

(30) 『野坂參三選集』(戦時編) 二二一～二四六頁「延安の思い出」、日本共産党中央委員会出版部、一九六二年、東京。

(31) 同上。

(32) 同上。また、王学文「王稼祥同志和抗日戦争時期党対敵軍工作的政策」(『回憶王稼祥』一二二～一二五頁収録、人民出版社、一九九五年、北京) 参照。

(33) 同注(22) 二九二～二九三頁。

(34) 同注(25) 五三頁。

(35) 同上五七頁。日本軍捕虜が八路軍や新四軍に参加した人数は、戦争の長期化にともない増加した。この詳しいことについては、小林清「在華日人反戦同盟概況」(全国中共党史研究会編『中国抗日戦争与世界反法西斯戦争』収録、中共党史資料出版社、一九八八年、北京)、水野靖夫『日本軍と戦った日本兵——反戦士の手記——』(白石書店、一九七四年)、香川孝志・前田光繁『八路軍中的日本兵』(時事出版社、一九八五年)、永峰正樹『八路軍とともに』(民報社、昭和二十二年)などが克明に記録されている。

(36) 同注(22) 二九二～二九四頁。

(37) 同注(30) 二四三～二四四頁。

(38) 同注(22) 二九四頁。

(39) 野坂參三によれば、延安に着いた時、「林哲」という仮名を用いたが、その後、「岡野進」にかえた。「この

仮名は私がソ連で使っていたもので、外国の同志は、この名で知っていた。本名の「野坂參三」は、一九四六年一月に、私が東京に帰った時に、十六年目につかったのである」(同注(30) 二四四～二四五頁)という。だからこそ、この書信は「林哲」あてに出されたものである。この書信の原文と邦訳は、注(30)の口絵に見える。

(40) この二つの大会の意義は以下の三点である。一、兵士の戦争停止、帰国などの具体的要求を提出する、二、交歓工作を強化する、三、組織と指導を延安中心に統一することである。(同注(22) 二八六～二九一頁参照)。

(41) 藤原彰編『資料 日本現代史』一卷三五三～三五五頁、大月書店、一九八〇年、東京。

(42) 同注(25) 一三四～一七四頁。また、ニューヨーク在住中の石垣綾子によれば、一九三九年七月十三日付で、ある新四軍の敵対工作部の五名の日本軍捕虜から彼女あてに反戦の手紙が送られ、彼女との反戦連帯関係を結びつけようと呼びかけていたという。(同注(9) 一八〇～一八二頁)。

(43) 同注(22) 二八四～二九一頁。

(44) 袁旭等編『第二次中日戦争記事』(一九三一・九～一九四五・九) 三三三頁、档案出版社、一九八八年、北京。

(45) 同注(25) 一九七頁、また同注(30) 三六五頁「日本人民解放連盟綱領草案」は、延安の『解放日報』に

よって邦訳されたものであると示されている。

(46) 同注(19) 五五頁。

(47) 同注(30) 二三二頁。野坂によれば、中国へ行く「計画をコミンテルン(国際共産党)の書記長である(現在)ブルガリアの総理」デミトロフにもちこんだところ、彼も快諾してくれて、これを実現するように、いろいろ助けてくれた」という。

(48) 同注(30) 二九四頁。

(49) 同注(41) 四二一、四二二頁「解説」。

(50) 同注(4) 二七三頁。

拙稿は戦後五十年、ならびに本誌創刊十周年の記念に捧げる。

一九九五年六月脱稿